

栗山町の北側に、市街地と隣接する御大師山がある。標高一一四、八メートルの小さい丘陵地の三角点の呼び名で、栗山公園敷地ともなっており、後背地は、ハチャンベツの沢をはさみ、栗沢町まで約三〇〇ヘクタールの雑木林がつづいていて、

御大師山には、四国八十八ヶ所めぐりの巡回路を含む遊歩道があり、町民が身近な自然と触れあえる恰好の散策コースとなっている。四年前、この雑木林にオオムラサキが発見され、その保護をめぐり、町民の間に「開発か保護か」「自然と人間のあり方」をめぐる論議がかわされてきた。

栗山の風土を象徴するオオムラサキ

栗山町には、栗山町教育委員会で発行した「栗山の自然をさぐる」という理科の郷土読本がある。一九八六年三月発行され、栗山町の小学生(四年)を対象に配布されて実際の授業に使用されている。全国一律の教材では伝えられない、生きた地域の自然をありのままに子どもたちに伝承していくためである。

御大師のオオムラサキは幸か不幸か、この副読本作成のための調査中に発見されたのである。北海道のオオムラサキの生息地は、何故か石狩低地帯にのみ点在する。北限は浜益町で栗山町、長沼町、由仁町、札幌市、小樽市、余市町等の限られた雑木林に生息している。

栗山町の生息地は、日本では北東限にあたり、私達は「北限地域」という表現をしている。オオムラサキは、浜益と栗山を結ぶ線を境にして、現在のところ、ここより北には分布していない。この線は、幼虫の食樹であるエゾエノキの植生分布と一致している。春一番に羽化するエゾヒメギフチョウは、オオムラサキとは反対に、この線を境に北東部に分布している。

冷温帯林から亜寒帯林への移行地帯である栗山附

高橋 慎

高橋 慎(たかはし まこと)

1950年北海道夕張市に生る。

栗山町立栗山小学校勤務、現在栗山のオオムラサキを守る会事務局長。

主な関心分野は身近な自然の保護と再生。



オオムラサキの森づくり

近の雑木林の植生は、とくに極だつて希な種はないが、ヤムニウシ(栗の木の茂る所)の地名とおり、エゾエノキ等の北限の種が混つた多様で独特な形態を有する。

この植物分布の多様性は、昆虫や淡水魚分布の多様性にも表われている。また、この北限種と南限種の境目的な生息地となっている根拠は、昆虫で言えば食草、食樹となる植物分布に大きく起因しているが、淡水魚の分布から推測するに、この地の地形の成り立ちにも左右されているように思われる。このことは今後進められていくであろう、色々な調査・研究により明らかになっていくに違いない。

少なくとも、「北限地域のオオムラサキ」の生息する雑木林は、栗山の風土を象徴しており、その意味でも守っていかなければならない森である。

オオムラサキの森はみんなの森だ

オオムラサキの森づくりを進めようと、栗山オオムラサキの会が発足した当時、「エゾエノキをたくさん植えてオオムラサキを増やそう」という意見が多くあつたように思う。しかし、オオムラサキは幼虫の食樹であるエゾエノキの存在だけでなく、成虫が食する樹液の出るミズナラ、コナラ、ハルニレ、クリ等で構成される豊かな雑木林を必要とすること、オオムラサキの世代交代を可能とするエゾエノキが、少なくとも一三〇年の樹齢をもつものでなければならぬこと、この二つの理由により、オオムラサキの森づくりは、総合的な森づくりでなければならぬと考え方がまとまってきた。

すなわち、オオムラサキのすむ森は、オオムラサキの天敵も含め、すべての動植物によつて成り立つ生態系を維持していくことが大切であることへと認識を深めてきている。

また、私達人間と雑木林の関係のあり方や自然と

人間の共生の道を探るべく、町民間のコミュニケーションシオンづくりの取り組みも、積み上げてきている。保護運動の理解のために作成したオオムラサキのテレホンカードには、次のようにメッセージがのせられている。

私たちの町、栗山には、国蝶オオムラサキがすんでいます。日本では最も生存条件の厳しい、北東限にあたる貴重な生息地です。

オオムラサキのすんでいる雑木林は、栗山公園のある御大師山で、四季折々に多くの野草が花を咲かせ、エゾリスや野鳥、ザリガニやクワガタムシもすむ、町民のいこいの場です。

私たちは、このオオムラサキを保護し森づくりをすすめることを通して、この自然の遺産を後世に伝えていこうと考えています。

私達オオムラサキの会では、世界的な自然破壊の問題をも考えていける地域的な取り組みを、この栗山の地で、身近な生き物との交流を通じて、一歩一歩着実に進めていこうと考えている。

動き出した街の人々

自然と触れあい、自然の理解を深めようとする動きは、一方では、理科副読本を通じて栗山の子どもたちに対して、他方では、自発的な自然を愛するサークルの活動として実際に行われている。

理科副読本「栗山の自然をさぐる」は、今、来年度よりの全カラー版改訂に向けて、また更に深められ作製されつつある。教育委員会も予算措置を行い全面的にバックアップしている。この「自然をさぐる」は、また月2回発行の町報くりやまに記載され、全町民向けの自然ガイドの役目も果たしている。

御大師山をベースにしたサークルは、歴史的遺産の保存を主とする御大師山を愛する会、野草と親し

む植物同好会、野鳥観察のオットリクラブ、御大師山水系の調査を進めるホタル救援隊とオオムラサキの会である。これらの団体が個別に、あるいは共同して、観察会や環境づくりを、地域の育成会や町民とともにこなって来ている。オオムラサキの会は、



エゾエノキの葉に止まるオオムラサキ。

現在のところ、この自然と親しむ人達を結ぶコーディネートネットの役割を果たしていると考えている。

この御大師山をめぐる種々の「自然保護」の気運の高まりの中で、商工会青年部や青年会議所もまた、御大師山を含めたハチチャンベツ地域一帯の自然を守

り、拡充していく方向を打ちたて「自然・産業・文化への提言」の中でまとめるにいたっている。

また、町役場も、その長期発展計画の中で栗山公園に続く雑木林一帯を「ふるさと自然財産」として購入していくことを明記したのである。

息の長い取り組み

ここ数年の各種会議の中で明らかにされてきていることは、少なくとも御大師山は、町民のふるさとのシンボルとして、出きるだけ傷をつけないで保護していこうとする考え方が定着しつつあることである。しかし、決して財力が豊かでない小さな町のこと、虫けらのために金を使うこと、一銭にもならぬいかのような活動に援助していくことが、町民全体のニーズになるためには、まだまだ時間のかかることに違いない。

私達オオムラサキの会は、この町民の理解を得ていく手だてとして、「オオムラサキの幼虫の飼育観察を行い一般公開する」という本来的ではない手法をとっている。オオムラサキが自然状態で誰もが観れるように増えるためには、もともと豊かな雑木林をつくる必要があることを訴えながら。未来の子供達がいままで、御大師山をかげずりまわり、チョウやトンボやクワガタムシを追いまわし、泥んこになってザリガニやドジョウとたわむれることができるよう、そんな場づくりを進めていきたいと考えている。

私達人間の子どもの悪さも許容してくれる自然の懐の広さと厳しさを何も言わずとも教えてくれる身近かな自然を残していく息の長い取り組みが今後も続く。地域を愛し、自然と共生できる人づくりのために。